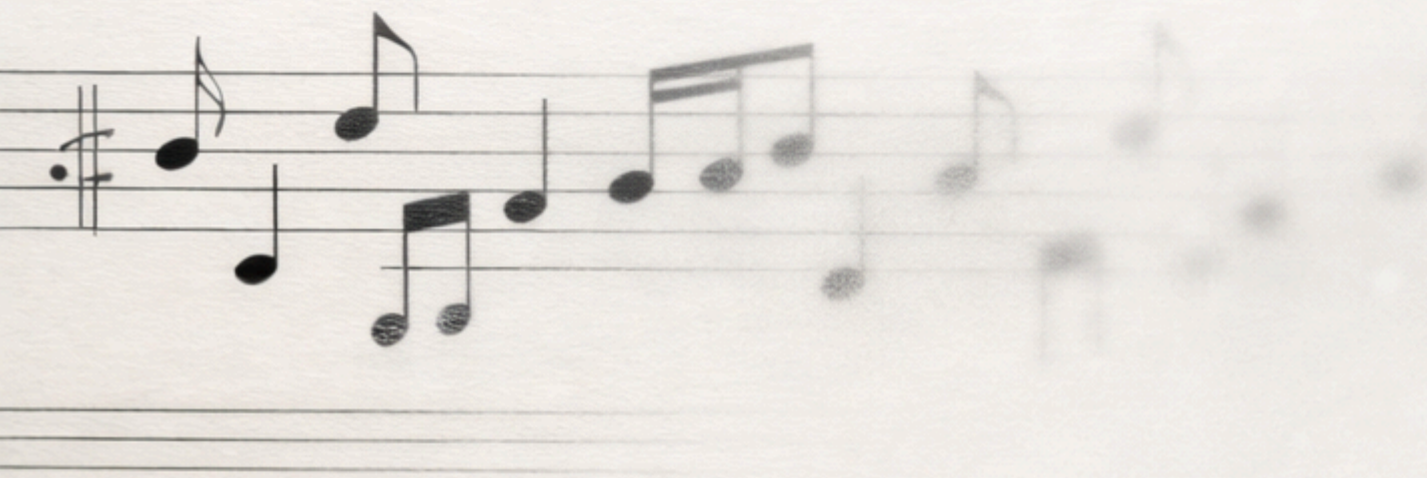
Raffiné Journal vol.17



完成しているのに、
いま生まれているように聴こえる

整っているのに、
閉じていないものがある。

形はすでにあるのに、
その場で生まれているように見える。

完成しているのに、
まだ呼吸している。

そういう表現に、
ときどき出会う。

きれいに整っているのに、
どこか止まって見えるものがある。

逆に、構造は明らかに整っているのに、
なぜか“いまここで起きている”ように
感じるものもある。

どちらも完成度は高いはずなのに、
片方は保存されたように見えて、
もう片方はまだ動いているように見える。

この違いは、上手さでは説明できない。

あるピアニストが、ショパンの音楽について
「完璧に書かれていて美しいのに、
その場で生まれているように聴こえる」
と話していた。

譜面はすでに存在していて、
音の配置も構造も、すべて整っている。

それでも、音として立ち上がるとき、
“再現”というより、
“いま生まれているもの”
のように聴こえる瞬間がある。

完成度の高い演奏は、安心して聴ける。
音は整い、流れも破綻がない。

けれど、どこかで終わっていると感じることがある。

一方で、同じように整っているのに、
次に何が起きるのかを待ってしまう演奏もある。

すでに形はあるのに、
まだその先が続いているように感じる。

整いすぎたものは、
音が鳴る前から、終わり方までが決まって見える。
だから、その途中で何も起きない。

けれど、整っているのに動いて見えるものは、
形の中に、どこか余白が残っている。

その余白が、
いま起きている感覚をつくる。

完成しているかどうかではなく、
止まって見えるか、まだ動いて見えるか。

表現の強さは、その差に出ることがある。

すべてを整えきることで閉じるものと、
整っていても、どこか開いたままのものがある。

その違いは、技術の量ではなく、
どこで止めるかの感覚に近い。

整えることと、閉じることは同じではない。

形があるのに、
まだ生まれているように見えるとき、
その表現は、ただの完成には収まらない。

完成しているのに、
まだ始まっているように見えるものがある。

R.

Raffiné Journal vol.17
2026

美学思想家
古川玲奈

発行：Raffiné